久高島イザイホーの神歌の分類

畠山　篤

はじめに

イザイホー　沖縄県久高島で一二年に一度、午歳の一一月一五日から一八日までイザイホーが執り行われていた。その次第（儀礼）、神歌（一一種類）のうたわれる場、祭りの趣旨については、畠山篤（二〇〇一）に述べたので、参照されたい。

本論のねらい　本論では、まずこの神歌群を包括的に分類する。次いで、紙幅の関係上、この神歌群のうちⅡ夕神遊（ユクヌーガミアシ）びのティルル②とⅡ暁神遊（アカトゥチガミアシ）びのティルル②、Ⅳ髪垂（カシラリ）れ遊びのティルル、Ⅴ泉神遊（ハーガミアシ）びのティルルの三種類を取り上げ、次第（儀礼）を考慮しながらその主題と構造を考察し、イザイホーの祭祀世界を浮き彫りにする。

一　神歌の分類

三段構成の神歌（一類）　イザイホーの神歌は、その主題と構造から二つの神歌群に分類できる。

まず、i神遊び・ii諸々の祈願・iii奉仕の誓いを三段構成で述べる神歌がある。その神歌とは、Ⅱ夕神遊（ユクヌーガミアシ）びのティルル②とⅡ暁神遊（アカトゥチガミアシ）びのティルル②、Ⅳ髪垂（カシラリ）れ遊びのティルル、Ⅴ泉神遊（ハーガミアシ）びのティルル、Ⅵ朱付（シュチキ）け遊びのティルル、Ⅹ桶廻（グキマーイ）りのティルル①（外間殿）、Ⅺ桶廻（グキマーイ）りのティルル②（久高殿）である。Ⅱ夕神遊（ユクヌーガミアシ）びのティルル②とⅡ暁神遊（アカトゥチガミアシ）びのティルル②は、名称が異なるが、実体は同じである。すなわち、その歌詞も曲も同じであり、神女たちがはじめて聖域に入る時にうたわれて、その働きも同じである。それでともにⅡとした。

以上の六種類の神歌群を一類とする。

神霊の来臨（二類）　次に、神霊（aニライカナイからの来訪神、bノロと根神のシジ、cナンチュのウプティシジ）の来臨・去来を述べ、これらの神霊の来臨・去来にかかわる儀礼に

ついて述べる神歌がある。その神歌とは、Ⅲ柄杓取りのティル（ニーブトゥイ）ル、Ⅶニライカナイ遥拝のティルル、Ⅷ綱（アクリヤー）のティルル、Ⅸ一般家庭廻（アサンマーイ）りのティルルである。

以上の四種類の神歌群を二類とする。

一類と二類の複合　これら一類と二類を複合する形でうたわれるのが、Ⅰイザイホーの元（ムトゥ）ティルル」（ノロ殿内（トゥンチ）のウムイとも）①（外間ノロ殿内（トゥンチ）のウムイ）・②（久高ノロ殿内のウムイ）、Ⅰ夕神遊（ユクネーガミアシ）びのティルル①、Ⅰ暁神遊（アカトゥキガミアシ）びのティルル①である。

これらの神歌も、名称が異なるが、実体は同じである。すなわち、その歌詞も曲も同じであり、神女たちがはじめて聖域に入る時にうたわれて、その働きも同じである。それでともにⅠとした。

これらⅠの神歌の構造は、一類のⅰ神遊びの様式で祭日を祝福するとともに、二類の様式で神霊の来臨（a・b・c）を述べ、次いで一類の様式でⅱ諸々の祈願・ⅲ奉仕の誓いを述べている。Ⅰの神歌は、一類と二類を複合させた形態をとっているのである。

これらⅠの神歌は、本祭りを始めるにあたって一類と二類の神歌の基本を示していると考えられる。とくに一日目のはじめにうたわれる神歌を「イザイホーの元ティルル」と称したのは、

〈イザイホーの神歌の分類の一覧表〉

一　類（神遊び、祈願、奉仕の誓いの三段構成）	二　類（神霊の来臨）
Ⅰ　イザイホーの元（ムトゥ）ティルル（ノロ殿内のウムイとも）①外間ノロ殿内のウムイ・②久高ノロ殿内のウムイ	
Ⅰ　夕（ユクネー）（暁（アカトゥキ））神遊（ガミアシ）びのティルル①	
Ⅱ　夕（ユクネー）（暁（アカトゥキ））神遊（ガミアシ）びのティルル②	Ⅲ　柄杓取（ニーブトゥイ）りのティルル
Ⅳ　髪垂（カシラ）れ遊（ハリアシ）びのティルル	Ⅶ　ニライカナイ遥拝のティルル
Ⅴ　泉神遊（ハーガミアシ）びのティルル	Ⅷ　綱（アリクヤー）のティルル
Ⅵ　朱付（シュチキ）け遊（アシ）びのティルル	Ⅸ　一般家庭廻（アサンマーイ）りのティルル
Ⅹ　桶廻（グキマーイ）りのティルル①（外間殿）	
Ⅺ　桶廻（グキマーイ）りのティルル②（久高殿）	

本祭りを始めるにあたってイザイホーの基本を示したからだと考えられる。これに対して、Ⅰイザイホーの元ティルル以下の神歌の名称は、神遊びの場や神歌の管理者に基づいていて、部分的である。

こうしてみると、Ⅰイザイホーの元ティルル（一類と二類の複合）以下にうたわれる一類、二類は、Ⅰイザイホーの元ティルルの分化・展開した姿だと考えられる。

イザイホーの神歌の分類一覧　以上、イザイホーの神歌の分類をまとめると、次の一覧表のようになる。

テキスト　筆者が考察の対象にしたイザイホーの神歌のテキストをイザイホーの執り行われた年を溯って記すと、次のようになる。

現行（一九七八年）の神歌を採録したテキストは、次のとおりである。

○高橋六二　一九七九ａ　「神遊び」『神の島の祭り　イザイホー』　雄山閣

○宜保栄治郎　一九七九　「イジャイホーの神歌」『イザイホー調査報告書ー久高島イザイホー民俗文化財特定調査』沖縄県教育委員会

○比嘉康雄　一九九〇ｂ　『神々の古層⑤主婦が神になる刻』ニライ社

○比嘉康雄　一九九三ａ　『神々の原郷久高島　上巻』第一書房

○大城学　一九九三　「イザイホーの儀礼と歌謡」『沖縄久高島のイザイホー』　砂子屋書房

一九六六年（昭和四一）の神歌を採録したテキストは、次のとおりである。

○仲宗根政善・湧上元雄　一九六八　『仲宗根政善・湧上元雄ノート』（外間守善・玉城政美　一九八〇ａ『南島歌謡大成Ⅰ沖縄篇上』角川書店に再録）＝仲宗根・湧上ノートと略称する

○安泉松雄　一九九一　「安泉松雄ノート「イザイホーの御祭り」」『久高島の祭りと伝承』桜楓社＝安泉ノートと略称する

一九五四年（昭和二九）以降に神歌を採録したテキストは、次のとおりである。

○外間守善　一九六三　『外間守善ノート』（外間守善・玉城政美　一九八〇ａ『南島歌謡大成Ⅰ沖縄篇上』　角川書店に再録）＝外間ノートと略称する

一九四二年（昭和一七）の神歌を採録したテキストは、次のとおりである。

○鳥越憲三郎　一九六五　『琉球宗教史の研究』　角川書店（外間守善・玉城政美　一九八〇ａ『南島歌謡大成Ⅰ沖縄篇上』　角川書店に再録）

二　タ（暁）神遊びのティルル②

三段構成の神歌（一類）　まず、i神遊び・ii諸々の祈願・iii奉仕の誓いの三段構成をとる神歌（一類）を検討する。

Ⅱ夕（暁）神遊びのティルル②　まず、一日目のⅡ夕神遊（ユクネーガミアシ）びのティルル②と二日目のⅡ暁神遊（アカトーガミアシ）びのティルル②を検討する。前述したように、この二つの神歌は名称が異なるが、実体は同じである。すなわち、その歌詞も曲も同じであり、神女たちが聖域に入る時にうたわれて、その働きも同じである。それでともにⅡにした。

この神歌の本文と共通語訳は仲宗根・湧上ノートの「イザイホーのティルル」を上げる。引用は、外間・玉城（一九八〇a、五九六・五九七頁）による。A・Bなどの段落区分は、内容上から筆者が付した。

そして、安泉ノートの「夕神遊びのオモロ（アサギ家の中）」、ならびに比嘉（一九九三a）のティルルと比較する。

祭日の祝福

A一　てぃーうとぅみゃーや　今日とまは
二　なまいがーや　今吉日は
三　むむとぅまーる　百年まで
四　てぃんとぅまーる　千年まで
五　いぢゃいほーよー　イヂャイホーよ
六　なんちゅほーよー　ナンチュホーよ
七　しむてぃきゃーが　霜月が
八　はにてぃきゃーが　端月が
九　いてぃりぐち　いてぃりぐち
一〇とぅかしあーし　とぅかしあーし
一一てぃきがなか　月の中

霜月（一一月）の対語が端月（果て月）なのは、一一月が祈願する年中行事の最後の月だからである。「いてぃりぐち」と「とぅかしあーし」が語義不詳だが、比嘉（一九九三a）は「アミドゥシ祭り」・「十日過ぎの」と解釈している。湧上（二〇〇〇・七四頁）によると、「いてぃりぐち」は徳仁港のことでアミドゥシ祭りの祭場を指し、「とぅかしあーし」は十箇瀬の神々を合わせと解釈している。すなわち、漁の祭り・アミドゥシを徳仁港で執り行って漁場の十箇瀬の神々を集め、と解するのである。「てぃきがなか」（月の中）とは、その後の一五日からイザイホーが始まることをいっている。

Aは、イザイホーの執り行われる今日（一一月一五日）の吉日が永遠に続く、と祝福している。

禊

B一二さしぷたーや　さしぷ達は
一三あさかわぬ　あさ〈親〉井泉の
一四むむくびー　百汲み
一五あしゃしょーぢ　あさ清水
一六ゆーしょーぢ　ゆー清水

サシプとはノロなどの高級神女を指している。安泉ノートは、

一三の「あさ」と一五の「あしゃ」を朝、一六の「ゆー」を夕と解している。比嘉（一九九三a）では、一五が「イティヌソージ」、一六が「ナナヌソージ」になっている。イティ、ナナは五、七の義で聖数である。「しょーぢ」「ソージ」は精進である。

Bは、高級神女たちが朝夕、イザイ泉（ガー）で禊をしている、と述べている。

ノロの祈願

C一七ぬるがあむとぅしぢ　祝女のあむとぅセヂ〈霊力〉
一八みんなかや　みんなかや
一九まんけーとぅてぃ　真向かい取って

比嘉（一九九三a）では、一七がヌルガシジ、一八がミーウブクゥイミンナカになっている。「ぬるがあむとぅしぢ」もヌルガシジも同じことで、シジ（霊力）を憑けたノロの尊称である。ミーウブクイミンナカは、神屋（外間殿・ノロ殿内など）の東南にあり、香炉を置くとともに神饌を供える所である。

Cは、ノロが神屋のミーウブクイミンナカの香炉に祈願している、と述べている。

イザイホーの元ティルルの神遊び

D二〇いぢゃいほーぬ　イヂャイホーの
二一むとぅている　本ティルルを
二二なやがらち　鳴り上がらして

Dは、イザイホーの元（ムトゥ）ティルルの神遊び（一日目）をする、と述べている。

比嘉（一九九三a）は、このDを次のように採録している。

○　サシプターラ　サシプたちは
○　ヤジクピィティ　ヤジクを引き連れ
○　ナンチュピィティ　ナンチュを引き連れ
○　イザイホーヌ　（ママ）
○　ムトゥティルル　ムトゥティルルを
○　ナヤガラチ　高らかに歌い

この本文の方が、主題を丁寧に述べている。Dは、高級神女たちが一般神女たちを引き連れてイザイホーの元（ムトゥ）ティルルの神遊びをする、と述べているのである。

この段落は、夕（暁）神遊びがイザイホーの元（ムトゥ）ティルルの神遊びを踏まえていることを示している。

神女の祭場への登場

E二三はんあさぎ　神あさぎ〈神を祀る家〉
二四はんがまみゃー　神の真庭
二五いていていばし　五つ橋
二六ななていばし　七つ橋
二七ふしゃていらき　腰当テ嶽（ママ）
二八ふしゃていむい　腰当テ森（ママ）
二九いていやるい　五宿り
三〇ななやるい　七宿り

いずれも御殿庭（久高殿）にある祭場とそこにある付設物で

ある。五宿り、七宿りは七つ屋のことである。

Eは、祭場と付設物を羅列することによって、神女たちが祭場に登場し七つ橋を渡って七つ屋に籠もる、と述べている。この段落は、神懸かった神女たちが祭場を疾走する緊迫した状況を、名詞の列挙によって活写している。

七つ橋渡りの神遊び

F三一いてぃてぃぐるー　五つ男は
三二うとぅがにーや　ウトゥ金は
三三てぃらもとーてぃ　手玉を取って
三四いてぃてぃばし　五つ橋
三五ななてぃばら　七つ柱
三六あしとぅんしゃん　足跳んだ
三七ぴしゃとぅんしゃん　足跳んだ
三八むるとぅぬぎ　諸飛び
三九むるぐるい　諸越え

安泉ノートは、三三の「てぃらまそーてぃ」（手玉を取って）の次に「まだまそーてぃ」（真玉を取って）が続く。比嘉（一九九三a）は、「マダマソーティ」（真玉を取って）の次に「ティダマソーティ」（手玉を取って）が続く。対句仕立てをとる神歌のあり方から見て、この両者のあり方が適切である。安泉ノートは三五の「ななてぃばら」を七つ橋と解し、また比嘉（一九九三a）もナナティバシラ（七つ橋）としている。

Fは、ナンチュを先導する五ツグルー・ウトゥガニが夕神遊び（あるいは暁神遊び）で七つ橋渡りの神遊びをする、と述べている。すなわち、五ツグルー・ウトゥガニが首に真玉を掛け、手に手玉をして、足取りも軽々と疾走して七つ橋を渡る、と述べている。

右のように常識的に考えて五ツグルーの言い換えがウトゥガニだとすると、この段落は現行の儀礼（正確には本来の儀礼と考えられる形）と半分しか対応していない。ここには外間側のナンチュを先導する五ツグルー・ウトゥガニの神遊びだけが述べられており、久高側のナンチュを先導する七ツグルーの神遊びが述べられていないのである。この点は、Fの他の本文（安泉ノート、比嘉・一九九三a）にも異同がない。また右のことは、このFと同じ段落を持つ以下の一類の神歌でも同じである。

五ツグルー・ウトゥガニ・七ツグルー　このように五ツグルーの言い換えがウトゥガニだとし、現行の儀礼（正確には本来の儀礼と考えられて形）に対応した神歌があるとすると、それは次のような対句になると想定される。なお、「ななてぃぐるー」の言い換えの名前が不詳なので、（名前）としておく。

○いてぃてぃぐるー　五つ男は
○うとぅがにーや　ウトゥ金は
○ななてぃぐるー　七つ男は
○（名前）や　（名前）は

しかし、前述したように七ツグルーは神歌のどの本文にも登場していない。

また、この段落の三一・三二の解釈（五ツグルーとウトゥガニの関係）には、別解が伝承としてある。五ツグルーと七ツグルーの神役を出している志茂（シム）門中の神女は、三一・三二を解して①志茂門中の神アシャギの主人・五ツグルーの娘ウトゥガニのことだとも、②志茂門中の五ツグルー（兄）と七ツグルーウトゥガニ（弟）のことだともいう。すなわち、五ツグルーとウトゥガニが①父娘の関係にあったり、②兄弟の関係にあったり、ウトゥガニが女性だったり、男性だったりしている。五ツグルーの言い換えがウトゥガニだとは、単純に言えないのである。三一・三二の解釈はイザイホーの由来譚ともかかわっており、容易に解きがたい問題を抱えている（後述）。

i段　以上、祭日の祝福を述べるAから神女たちの神遊びなどの行為を述べるFまでが、i神遊びを主題にする段落である。

以上の神遊びの配列は、この日（一日目）の祭りの時間的展開の順になっている。すなわち、禊をし（B）、ノロが祈願し（C）、イザイホーの元ティルルの神遊びをし（D）、神女が祭場に登場し（E）、七つ橋渡りの神遊びをする（F）のは、儀礼の次第に対応している。

ただし、安泉ノートの段落の順は仲宗根・湧上ノートと同じだが、比嘉（一九九三a）の段落の順はA・B・C・F・Dなので、この神遊びの配列は祭りの時間的展開の順になっていない。

諸々の祈願

G四〇なんちゅほーほー　ナンチュホーホー
四一ひゃくにぢゅーが　百二十が
四二たきふくい　嶽誇り
四三むいぶくい　森誇り
四四ふしゃていぶくい　腰当（ママ）テ誇り
四五うんぢぶくい　恩義誇り
四六むとうたかい　本栄え
四七にーむてー　根盛り
四八しまたかい　島栄え
四九しまむてー　島盛り
五〇ぬぱるゆーい　野原の故
五一ぐいていゆーい　ぐいていの故

仲宗根・湧上ノートはここで中絶している。安泉ノートは、これに続いて次の節を採録している。節を示す番号と共通語訳は、筆者が付した。

五二西パイ　北南
五三パイ西　南北
五四ふぼーりーが　久高人が
五五あいくはた　歩く（行く）所
五六糸はきてぃ　糸（布）を掛けて（静かにして）
五七うたびみそーり　ください
五八うん年の　この年の
五九一年中　一年中

六〇んなふみてぃ　　みんなを誉めて（祝福して）
六一うたびみそーり　　ください

湧上（二〇〇〇、七四頁）によると、「ふしゃてぃ」（腰当て）は後ろ盾になる夫、「うんぢ」（恩義）は神の恩義によって生まれた子供（息子）のことである。「むとぅ」（本）と「にー」（根）は、元屋（草分け）のことである。「しま」は村落共同体のことである。湧上（二〇〇〇、七四頁）によると、「ぬぱるゆーい」は「ノロ原（ノロ地）も」、「ぐいてぃゆーい」は「村人の土地も」のことである。「にし」は北、パイは南の意である。「ふぼーりー」は蒲葵島連、すなわち蒲葵島（久高島の異称）の人の意であり、その実体は海人である。「糸はきてぃ」は糸（あるいは布とも）をピンと掛けたように海が静かになる意である。

Gは、ナンチュの長寿、御嶽・夫と息子・元屋・村落共同体の繁栄、豊作、渡海安全など、一年間の祈願を凝縮して述べている。

なお、Gはイザイホーにかぎらず他の年中行事でうたわれるティルルに頻出する類型的な詞章である。ただし、ナンチュの長寿を祈願する四〇・四一は、イザイホーにかぎって付加されている節である。

ii段　以上のGは、ii諸々の祈願を主題にする段落である。

奉仕の誓い　安泉ノートは、これに続いてさらに次の段落を採録している。節を示す番号と共通語訳は、筆者が付した。

H六一ニルヤとーし　　ニライに通し（遥拝し）
六三ハナーとーし　　カナイに通し（遥拝し）
六四天じとーし　　天と地に通し（遥拝し）
六五う寺とーし　　御ティラに通し（遥拝し）
六六タマガエー　　タマガエ（一般神女）は
六七マヘーとーし　　真南に通し（遥拝し）
六八スベーラキ　　スベー嶽を
六九うがみゃびて　　拝み
七〇はみやびてぃ　　戴きます
七一むむとまーる　　百年まで
七二てぃんとまーる　　千年まで
七三イザイホー　　イザイホーを
七四ナンチュホーや　　ナンチュホーを
七五ゆくゆいん　　いついつまでも
七六うがみゃびら　　拝みましょう
七七はみやびら　　戴きましょう

ティラは聖地のことである。島の真南にあるスベー嶽には、ノロと根神のシジ（守護霊）がいる。

Hは、ニライカナイ、天地、ティラ、スベー嶽を拝み、いつまでも奉仕する、と誓っている。Hは、神歌の結びとしてふさわしい。

なお、Hはイザイホーにかぎらず他の年中行事でうたわれるティルルに頻出する類型的な詞章である。ただし、イザイホー

の永続を祈願する七一～七四は他の神歌の奉仕の誓いの段落に用いられない句である。この四句は、前出のイザイホーに特有な詞章（三～六）がこの神歌にかぎって混入したものである。

ⅲ段 以上のHは、ⅲ奉仕の誓いを主題にする段落である。

夕（暁）神遊びのティルル②の構造 以上、Ⅱ夕（暁）神遊び（ユウネーアカトゥキガミアソビ）のティルル②の構造をまとめると、次の一覧表のようになる。

〈夕（暁）神遊びのティルル②の構造の一覧表〉

段落区分	主題	仲宗根・湧上ノート	安泉ノート	現行(比嘉)	構成
A	祭日の祝福	○	○	○	i
B	禊	○	○	○	
C	ノロの祈願	○	○	○	
D	イザイホーの元ティルルの神遊び	○	○	○	
E	神女の祭場への登場	○	○	×	
F	七つ橋渡りの神遊び	○	○	○	
G	諸々の祈願	中絶	○	○	ii
H	奉仕の誓い	×	○	○	ⅲ

※ ○×は有無を示す。以下同じ。

三　髪垂れ遊びのティルル

Ⅳ髪垂れ遊びのティルル 次に、二日目のⅣ髪垂れ遊び（カンタラリアソビ）のティルルを検討する。

この神歌の本文と共通語訳は、比嘉（一九九三a、三六七～三七〇頁）を引用する。A・Bなどの段落区分と節を示す数字は、筆者が付した。

そして、仲宗根・湧上ノートの「はしららりぬティルル」、ならびに安泉ノートの「髪垂遊びのオモロ」と比較する。

祭日の祝福

A一　ヒーウスマーヤ　　久しく

二　ナマイガーヤ　　今日の良き日
三　ムムトゥマール　　十二年ごとに
四　ティントゥマール　　めぐって来る
五　イジャイホーヨ　　イザイホーヨ
六　ナンチュホーヨ　　ナンチュホーヨ

Aは、Ⅱ夕（暁）神遊びのティルル②のAと同じく、イザイホーの祭日を祝福している。

髪垂れ遊び

B七　ハシララリ　　洗い髪で
八　チュナミナリ　　一重になり
九　タナミナリ　　二重になり
一〇ナミジュラサ　　円陣の美しさよ

仲宗根・湧上ノートは、七～一〇を「頭垂れ　一並になり　二並になり　並清らさ」と解している。

Bは、禊をした洗い髪の姿で一重から二重の円陣を作って舞う髪垂れ遊び（二日目）を賛美している。

神遊びを述べるにあたって、まずこの儀礼の中核になる髪垂れ遊びを述べている。

神女の祭場への登場

C一一　ハンアシャギ　　神の家
一二　ハンガマミヤ　　神の庭
一三　イチャヤドゥイ　　五ツ屋
一四　ナナヤドゥイ　　七ツ屋
一五　イティティバシ　　五ツ橋
一六　ナナティバシ　　七ツ橋

Cは、Ⅱ夕（暁）神遊びのティルル②のEと同じく、祭場と付設物を列挙し、神女たちが祭場に登場し、七つ橋を渡って七つ屋に籠もる、と述べている。

イザイホーの元ティルルの神遊び

D一七　ヌルガネータラ　　ノロ達は
一八　ヤジクピィチィ　　ヤジクを引き連れ
一九　ナンチュピィチィ　　ナンチュを引き連れ

これだけではDの主題がいささか不鮮明である。そこで、仲宗根・湧上ノートと比較する。次の引用は、外間・玉城（一九八〇a、五九九頁）による。

○　ぬるがねーたや　　祝女金は
○　やぢくぴち　　やぢくを引いて
○　なんちゅぴてぃ　　なんちゅを引いて
○　いぢゃいほーぬ　　イヂャイホーの
○　むとうてぃるる　　元ティルルを
○　なやがらち　　鳴り上がらして

この神歌にはDの本来の形が丁寧に示されている。Dは、Ⅱ夕（暁）神遊びのティルル②のDと同じく、ノロたちが一般神女たちを引き連れてイザイホーの元（ムトゥ）ティルルの神遊び（一日目）をする、と述べている。

嶽廻り

E二〇タマガエーヌ　神女たちの
二一ウプティシジヤ　ウプティシジは
二二イティヌタキ　五ツ(ママ)のウタキ
二三ナナヌムイ　七ツ(ママ)のウタキ
二四タキグェーシ　タキをこえ
二五ムイグェーシ　森をこえ

Eは、神女たちが一か月前から嶽廻りをしてナンチュのウプティシジを決める、と述べている。

七つ橋渡りの神遊び　比嘉（一九九三a）は五ツグルー・ウトゥガニの七つ橋渡りの神遊びを採録していないが、安泉ノートだけが七つ橋渡りの神遊びを述べる本文を採録している。次に引用する。口語訳は筆者が付した。

F○五グルー　五ツグルー
○ウトゥガニーや　ウトゥ金は
○てぃらまそーてぃ　手玉を取って
○まだまそーてぃ　真珠を取って
○五橋　五つ橋を
○七橋　七つ橋を
○あしとんさん　足跳んで
○ぴさとんさん　足跳んで
○むるとぬぎ　諸飛び
○むるぐるい　諸越え

Fは、久高側のナンチュを先導する五ツグルー・ウトゥガニが七つ橋渡りの神遊びをする、と述べている。

以上、神女の祭場への登場（C）、イザイホーの元ティルルの神遊び（D）、嶽廻り（E）、七つ橋渡りの神遊び（F）は、この髪垂れ遊びの前提になっている。

i段　以上、祭日の祝福を述べるAから神女たちの神遊びなどを述べるFまでが、i神遊びを主題にする段落である。

以上の髪遊びの配列は、この儀礼の中核になる髪垂れ遊びを先にしているが、以下は祭りの時間的展開の順になっていない。

諸々の祈願

G二六
〜
四七

Gは、Ⅱタ（暁）神遊びのティルル②のGとほぼ同じなので、引用を省略する。

Gは、諸々の祈願を述べている。

ii段　以上のGは、ii諸々の祈願を主題にする段落である。

奉仕の誓い

H四八
〜
六〇

Hは、Ⅱタ（暁）神遊びのティルル②のHとほぼ同じなので、引用を省略する。

〈髪垂れ遊びのティルルの構造の一覧表〉

段落区分	主題	現行(比嘉)	仲宗根・湧上ノート	安泉ノート	構成
A	祭日の祝福	○	○	○	i
B	髪垂れ遊び	○	○	○	
C	ノロの祈願	○	○	○	
D	イザイホーの元ティルルの神遊び	○	○	○	
E	嶽廻り	○	○	×	
F	七つ橋渡りの神遊び	×	×	○	
G	諸々の祈願	○	×	○	ii
H	奉仕の誓い	○	中絶	○	iii

Hは、奉仕の誓いを述べている。

iii段　以上のHは、iii奉仕の誓いを主題にする段落である。

Ⅳ髪垂れ遊びのティルルの構造　以上、Ⅳ髪垂れ遊（カシラリアシ）びのティルルの構造をまとめると、次の一覧表のようになる。

四　泉神遊びのティルル

Ⅴ泉神遊びのティルル　次に、三日目のⅤ泉神遊（ハーガミアシ）びのティルルを検討する。

この神歌の本文と共通語訳は、比嘉（一九九三a、三八一～三八四頁）を引用する。A・Bなどの段落区分と節を示す数字は、筆者が付した。

そして、仲宗根・湧上ノートの「はーがみあしび　ぱなたしあしびぬのティルル」、ならびに安泉ノートの「ハー神遊びのオモロ」と比較する。いずれも、比嘉（一九九三a）と大きな異同がない。

祭日の祝福

A一　ヒーウスマーヤ　　久しく
二　ナマイガーヤ　　今日の良き日
三　ムムトゥマール　　十二年ごとに
四　ティントゥマール　　めぐってくる
五　イザイホーヨ　　イザイホーよ
六　ナンチュホーヨ　　ナンチュホーよ

Aは、イザイホーの祭日を祝福している。この段落は、Ⅳ髪

垂れ遊びのティルルのAと同じである。

泉神遊び

B七　イティカワヌ　　五ツの井泉の
八　ナナカワヌ　　七ツの井泉の
九　カワヌウシジ　　井泉の神様
一〇ミディヌウビー　　水の神様
一一ウサギノーチ　　祈願をして

Bは、神女が禊をする井泉の神に祈り、感謝する泉神遊(ハーガミアシ)びを述べている。

花挿し遊び

C一二ヌキバナン　　さしたイザイ花
一三サシバナン　　さしたイザイ花の
一四タキズゥラサ　　さしたさまの美しさよ
一五ハシズゥラサ　　さした美しさよ

仲宗根・湧上ノートは、Cに相当する段落を次のように採録し、解釈している。

○ぬきばな　　貫き花
○たしばな　　差し花
○たしぢゅらた　　差し清らさ
○なみぢゅらた　　並み清らさ

Cは、花挿(ハナサ)し遊(アシ)びを賛美している。

以上、神遊びを述べるにあたって、まずこの儀礼の中核になる泉神遊び（B）と花挿し遊び（C）を述べている。

イザイホーの元ティルルの神遊び

D一六ヌルガネータラ　　ノロたちは
一七ヤジクゥピィチ　　ヤジクを引き連れ
一八ナンチュピィチ　　ナンチュを引き連れ
一九イザイホーヌ　　イザイホーの
二〇ムトゥティルル　　ムトゥティルル
二一ナヤガラチ　　高らかに歌い

Dは、ノロたちが一般神女たちを引き連れてイザイホーの元(ムトゥ)ティルルの神遊び（一日目）をしている、と述べている。仲宗根・湧上ノートは、Dまでしか採録していない。

七つ橋渡りの神遊び

E二二イティティグルー　　イティティグルー
二三ウトゥガニヤ　　ウトゥガニは
二四マダマソーティ　　真玉をして
二五ティダマソーティ　　手玉をして
二六イティティバシラ　　五ツ橋
二七ナナティバシラ　　七ツ橋
二八アシトゥンシャン　　足音もなく
二九ピィシャトゥンシャン　　足音もなく
三〇ムルトゥヌギ　　軽ろやかにこえ
三一ムルグゥルイ　　とぶようにこえ

Eは、久高側のナンチュを先導する五ツグルー・ウトゥガニが七つ橋渡りの神遊びをする、と述べている。

以上、イザイホーの元ティルルの神遊び（D）、七つ橋渡りの神遊び（E）は、この泉神遊びと花挿し遊びの前提になっている。

i段　以上、祭日の祝福を述べるAから神女たちの神遊びを述べるEまでが、i神遊びを主題にする段落である。

この儀礼の中核になる泉神遊びと花挿し遊びを先に述べている。以下の配列は、祭りの時間的展開の順になっている。

諸々の祈願

F二二一

〜

五三

Fは、Ⅱタ（暁）神遊びのティルル②のFとほぼ同じなので、引用は省略する。

Fは、諸々の祈願を述べている。

ii段　以上のFは、ii諸々の祈願を主題にする段落である。

奉仕の誓い

G五四

〜

六六

Gは、Ⅱタ（暁）神遊びのティルル②のGとほぼ同じなので、引用は省略する。

Gは、奉仕の誓いを述べている。

iii段　以上のGは、iii奉仕の誓いを主題にする段落である。

〈泉神遊びのティルルの構造の一覧表〉

段落区分	主題	現行(比嘉)	仲宗根・湧上ノート	安泉ノート	構成
A	祭日の祝福	○	○	○	i
B	泉神遊び	○	○	○	i
C	花挿し遊び	○	○	○	i
D	イザイホーの元ティルルの神遊び	○	○	○	i
E	七つ橋渡りの神遊び	○	×	○	i
F	諸々の祈願	○	×	○	ii
G	奉仕の誓い	○	×	○	iii

Ｖ泉神遊びのティルルの構造　以上、Ｖ泉神遊（ハーガミアシ）びのティルルの構造をまとめると、右の一覧表のようになる。

〈引用文献・参照文献〉

「神歌の分類」のテキストの項に上げた文献を除く。
畠山篤　二〇〇一　「イザイホーの次第」『奄美沖縄民間文芸学（創刊号）』（奄美沖縄民間文芸学会）
湧上元雄　二〇〇〇　『沖縄民俗文化論』（榕樹書院）

（はたけやま・あつし／弘前学院大学）